
Cafe Slow Life 忙しくもゆるやかな日

木立あろえ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Cafe Slow Life 忙しくもゆるやかな日

【Zコード】

Z6368C

【作者名】

木立あろえ

【あらすじ】

のんびりとした空気ただよう「喫茶スローライフ」アルバイトの女の子あゆむが、休憩中に居眠り。そのとき見た夢は、お店に入りたてのときのもの。マスターと、アルバイトの女の子。そして店に住み着いているかの「とく通いつめる常連。二者の織りなす、喫茶店ストーリー。

(前書き)

一行一行を大切に、すべての行に魅力を持たせるよう、努力しています。

未熟者ですが、よろしくお願いいたします。

バイトの私とマスターの一人でやっている喫茶店「スローライフ」は、名前の通りというかなんというか、ただただゆっくりとした空間と、マスターの淹れる（たまに私もいれる）おいしいコーヒーが売りの、ちょっとぴりイナカの商店街にある小さなお店だ。

私もマスターも悪い意味ではなくある意味お客様以上にくつろいで仕事をしているし、そんなゆっくりとした空間がすきだけれど、今日は祝日で下手な土日なんかより客の入りが良くて、昼からお客様さんがとぎれなかつた。現在四時十分、今の今まで私は休憩をとることができず、もうくたくたで、お腹もすいた。

本当は店員がカウンターなんかで休憩を取るべきじゃないのだけど、カウンターの裏はマスターの家だし、混まない時間に来る客といつのばとんどが常連さんで、私が居るからといって店に入るのをためらつたりなんてしないから、マスターも許してくれている。常連さんはみんな私の事を知っているし、むしろ積極的に私の休憩を邪魔しようとして入ってくるお客様さんまでいる。（その代表的なのが嶋井さんだ）

そう言えば今日は嶋井さんはまだ来ていない。あの人はたいてい、こういう忙しいときには来ない。まるで店内の状況が常に分かっているかのように、店がガラガラの時に来るので。

私はマスターの作ってくれたサンドイッチをぱくつきながら、淹れてくれたコーヒーにミルクと砂糖をたっぷりいれてぐびぐび飲む。マスターはとてもコーヒーにこだわっていて凝っているけれど、砂糖を入れるなとかブラックで飲めだと、そういう強制はいっさいしない。（ただ昔、ブルーマウンテンにミルクと砂糖をしこたま入れてきょとされたことがある）

店には絞ったボリュームでジャズミュー・ジックがかかっていて、ふわふわとコーヒーのにおいが漂つて、この店が好きな客にとって、

そして私やマスターにとつて限りなく落ち着く空間だ。

私はニースのはげかけた、それでもなめらかな感触のするカウンターに突っ伏して、右手の人差し指で飲み終わったコーヒーカップの縁をなぞった。カップをもてあそんでしまうのは私の悪い癖だ。水飲みグラスとか湯飲みとか、飲み終わっているいにかかわらず縁を指で撫でたあげく、傾けてくるくると回してしまう。何度かそれで、中身をこぼしてしまったこともある。

「あゆむ君、疲れた？」

「もうだめ、死んじゃう」

私が答えると、マスターは笑った。

「でもまあ、明日も明後日も私が死ねるくらいのお客さんが来るといいんだけどね」

私が言つと、マスターは苦笑いして、

「それはちょっと無理だよ」

と言つた。

「なに経営者の方が弱気になつてゐるのさ。バイトがやる氣出しつつていうのに。もしかしたら今日来た新規のお客さんが氣に入つて明日も来てくれるかもしねりでしょ。」

「それはうれしい事だけど、今日は祝日、明日は平日だよ」

私は「むう」と心の中で唸る。

「でも今日は、あゆむ君が本当によく働いてくれて助かつたよ」

マスターはうれしそうに言つけれど、本当はマスターが、お店があまり忙しくなるのが好きじゃないのを私は知つている。

いつも来てくれている常連さんが、店が混んできたのに遠慮して席を立つてしまつのを、マスターは引き留めたくても引き留められなくて、ぐつと堪えていた。待つておるお客様さんが居る手前、「もつとゆっくりしていつてくれれば良いのに」とは口が裂けても言えないのだ。だから私とマスターは本当に心を込めて、「じゅつくりどうぞ」と、「ありがとうございました。またお越し下さい」を言う。いつもと同じだけのお金をもらつのに、あまりゆつたりできな

いお店。本当に申し訳なくて、たまらない。

この店で過ごす時間が、ゆつたりとした生活の一部であつてほしい。忙しい人にとってはなおさら、ここはゆつくりした場所でありたい。それがマスターの願いだ。たとえそれがお客様の回転のいい朝や昼でもそう。だからマスターも私も、どんなに忙しくても、どんなに急いでいても慌てたり、それがお客様に気付かれたりしないよう心がけている。

多分マスターは、経営者向きではない。

一時期地元の女子高生にこの店が流行った事があつて、店のほとんどを女子高生が占めていた事があつたのだけれど、その時もマスターは常連さんが遠慮して早めに帰つていいくのを寂しがつて、そして流行が去つて売り上げが落ちると店が落ち着いたと言つて常連と一緒にホッとしていたりした。

一時でも店が流行つたと言つのにうれしがるそぶりはまったく無いし、そのまま女子高生をターゲットにして売り上げを維持しようだとか、そういう考え方全くない。女子高生が押しかけたのを、「異常事態」としてしか受け取つていないので。(ただマスターの作ったクッキーやケーキを田端にて、たまにその頃の女子高生らしき人が来たりすることもあるけれど)

つまりマスターは、「どうやつたら店が居心地よくなるか」は考えて、「どうやつたら店が儲かるのか」をまったく考えない。しかも、その「居心地のいい店」というのが、普通なら「売り上げ」につながるはずなのだが、この店の場合まったく言つていほどのつながっていない。それは多分、マスターの考える「居心地のいい店」というのが、長居のできる店つまり言つてしまえば客の回転の悪い店だからだ。

ただ、女子高生が沢山來ていた時でさえ、今日ほどは忙しくなかつた。今日は私の見解から言わせると、元から居た早い時間の常連さん後に一見のお客さんが来て、その後に遅い時間に来る常連さんが一見のお客さんをサンドイッチにしてしまつた形だった。つま

り最初に居た常連さんが、後から来た一見さんや常連さんに押し出されてしまった形になる。

たいして広くもない店内だからすぐ満席になるし、常連さんの何人かは一日か二日に一度はスローライフに来てコーヒーを飲まないと気が済まないような、いわゆるスローライフ中毒みたいな人達だから、満席になつても怯まず外で待つてゐる。さらに後から来たお客様さんが満席だと分かつて帰ろうとすると、「大丈夫、ここ空くよ」と言つて出て行つてしまつくらいの優しさと度量でもつていつたりするのだ。すばらしそぎで、涙が出てくる。

これだけタイミング良く忙しかったのは、多分私がこの店で働き始めてから一度目。

一度目は私がここでバイトを始めて三日目ぐらいの時で、まだ仕事を全部覚えていなくて、ちょうどじゅうたりとした空気にだけずぶずぶと飲まれていた頃だった。私は予想外の忙しさに、おたおたしつぱなしだった。

その日はお昼までは前日とそつ大して変わらない客の入りだったのだけど、お昼になつて一変したのだ。気が付いたときにはもう満席で、私はどこから注文を取つて良いのかすら分からなくなるくらい一瞬で動搖してしまつた。昼時はただでさえ普段と比べて客の回転が速いのだ。

「ご注文をどうぞ」

と、まだ言い慣れていなかつた文句を言つてまづ帰つてきた言葉が、

「あの、僕達はもつ注文とつてもらつたよ」

だつた。私は勢いよく頭を下げて謝つた。言われて初めてその人たちが元から居たお客様で、さらに注文を取つたのも自分だと言うことに気が付いたのだ。ちょっとよく見れば、テーブルの上に飲みかけのコーヒーカップがあるし、すでに注文を取つてていることは、テーブルの横に伝票が引っかけてあることで分かるはずだった。たいして広くもない店内がとても広く感じた。どの席のお客さん

が何を頼んで、何がすでに出ているか。今なら大体頭の中で把握できるのだけど、その頃はまだそんなことができなくて、ただマスターに言われるままお皿を下げる料理やコーヒーを出したりした。

なんとか全てのオーダーができつて安心していると、チリリンと「うドアベル代わりの風鈴と共に、四人組のお客さんが入ってきて、（私がバイトを始めたのは、夏の盛りだった）私は不謹慎だけれど、今は満席だから受け入れは無理で、正直助かったと思つてしまつた。

「すみません、今席が全部埋まつてしまつていて
そこまで私が言つたとき、後ろから

「あ、大丈夫です。ここもう空きます」

と言つて二人組の、最初にいたお客様さんが立ち上がつた。
カウンターからマスターが、「すみません、ありがとうございます」と言つて頭を下げた。

「すぐお席ご用意しますね」

私がそう言つてお皿を下げに行くのと同時に、マスターがお会計をしにレジに行くのが見えた。マスターの仕事を増やしてしまったと思った。私が両方やるべきだと思つてしまつた。本当は、一人で片方ずつするのがお客様を待たせない一番良い方法なのだけど、そこまで考えるほどの心の余裕は、その時の私にはない。

焦つた私は見事に皿を落として、盛大に割つた。

「ごめんなさい」

と短く一気に言つて、私は割れたお皿に手を伸ばした。マスターも謝りながら、早足にカウンターから出てきた。そして少し強い調子で、

「危ないからいいつ、触らないで！」

予想外に大きな声に、私はビックリして身をすぐめた。マスターはホウキとちり取りで手早く割れたコップや皿を片づけると、細かい破片を取るために水ぶきする。「怪我はない?」と訊かれて、私は反射的に「はい」と答える。

「もう外はいいから、中で洗い物お願ひ」

マスターに言われて、私はカウンターの中に引っ込んだ。山盛りになつた食器を洗いながら、自分は何て役に立たないんだろうと思った。暇な日は大丈夫でも、少し忙しくなるとこれだ。洗い物だけで、マスターに比べたらとても遅い。こんなんで私は、お給料なんでもらつていいくんだろうか。私がウェイタレスとしてしつかり対応できる日なんて、マスター一人でも大丈夫じゃないか。

お金なんていらないから少しでも役に立ちたい。何もできない自分が、悔しくてしようがなかつた。

洗い物は後から後から増えて、私の遅い洗い方では全然減らなかつた。私は必死で、お皿を洗い続けた。やつと洗い物が少なくなつてきたと思った時にはお店はもう空いていて、時間も四時を回つていた。

まだ空いた席には下げるといない食器がいくつかあつた。私は急いでトレイを持って、食器を下げるに行こうとしたけれど、マスターに「僕が行くからいいよ」と止められてしまつた。

「今日は疲れたでしょ、カウンターで休んでいいよ」

マスターのその言葉で身体に入つていた力がフツと抜けて、私はカウンターに寄りかかるようにして椅子に座つた。残るお客様は一人。おそらく客が引けだしてから入つてきたのだろう、嶋井さんだけだつた。

マスターは食器を全て下げるど、サンドイッチとコーヒーを作つて私にしてくれた。

「今日はありがとうね。本当、助かつた」

「でも私、今日お皿しか洗つてない」

間髪入れずに私が言つと、マスターは「いやいや、僕がお皿洗つての余裕無かつたから」と言つてにっこり笑つた。

「それに一氣にお客さんが入つてきたとき、ちゃんとテーブルも片づけてセッティングしてくれたし、お客様の案内もしてくれたでしょ。さつきはごめんね、ついつい強い口調になっちゃつて。びっくりしたでしょ」

「そんなこと、ないです」

と、私はどぎれどぎれなんとか答えた。急激に心の緊張がとれた私は、感情のストッパーが完全に外れて、目からぽろぽろと涙をこぼしていた。私は恥ずかしくて、マスターに泣いてる事がばれないように、必死で縮こまつて腕で顔を隠した。今が秋か冬だったらよかつたのに、と思った。長袖の方が、遙かに涙を隠しやすい。

「そんくらいの忙しさで余裕をなくすなんて、マスターもまだまだ未熟だな」

と言つて、嶋井さんが私の後ろで笑つた。

「そのくらいつて、嶋井さん見てたんですか？」

とマスターが訊くと、「いや、見てないが、こんな狭い店で忙しつつても限度があるだろ？よ」と言つた。

「今日は、嶋井さんが思つてる以上に忙しかつたんですから」

「へえ」

とだけ、嶋井さんは言つた。

その時私はまだマスターの出してくれたサンディッシュを食べていなくて、とてもお腹が減っていた。とうとう我慢できなくなつて、腕で目を『じ』ことぬぐいながら顔を上げると、サンディッシュにかぶりついた。

マスターは私の顔を見るとびっくりしたみたいだけビ、

「別に泣いてないから」

と先制攻撃をしかけて私はバクバクとサンディッシュを平らげ、またうつぶせになつてそのまま寝てしまった。

私がうつぶせの体勢から顔を上げると、「あ、起きた」というマスターの声がした。それから間髪入れずに後ろから、「お前、営業中に堂々とカウンターで寝るとは何様だ」という嶋井さんの声。嶋井さんは相変わらず四人掛けの席で、テーブルいっぱいに新聞を広げている。一瞬、夢の続きをと思つた。私はそのまま寝てしまつて、思い出していた昔の記憶の夢をみたらし。

「そんなこと言つなら、起こしてくれればよかつたじゃん」

私が言つと、嶋井さんは呆れて、

「何處に客に起こしてもらう店員が居るつひとつんだ」

「いや、まあ……でもとつあえず」

私は寝ぼけた頭で何を考えたらいいのかからまず考えて、それから言わなければいけない一言を思い出す。

「いらっしゃいませ」

すると嶋井さんは私が何を言つたのか理解できないうな顔をして、それから腕時計を見ながら「二五分と四十秒遅えよ」と言つた。嫌味だー、細かい。

壁掛け時計を見てみたら、現在時刻は五時ちょうど。ほとんど私は一時間近く寝ていたらしい。

開け放しのドアと、開け放しの窓たち。その間を通る風はもうしつとりと湿っていて、暖かい。そろそろ春から夏になる。私が入口ーライフで迎える三度目の夏。

「そういえば、さつき新島君来てたよ」

「え、翔一が？ 私が寝てる間に？」

私が訊くと、マスターは「うん」と頷いた。嶋井さんが、「寝てる間じゃなきやいつだよ」とか言つたけれど、気にしない。

「ほんとに、起こしてくれればよかつたのに」

私がわざといじけたみたいな声で言つと、マスターは「ごめんなごめん」と謝つて、

「起こそうとはしたんだけど、新島君が起こせなくしてこつて言つからさ。特に用があるわけじゃ無いみたいだったし、『一ヒーだけ飲んで帰つてつたよ』

「翔一に用が無くても、私が用あるかもしれないでしょー。」

「用、あつたのか？」

嶋井さんに言われて、私は椅子」とガタガタとそつちに振り向いて、「いや……ないけど」と答える。

「じゃあいいじゃねえか」

「やつ言つ問題じゃなくて、もしかしたひ、つて話」

「今回はその“もしか”してないんだろ」

「だからそういう言つんじやなくて」

と、なんだかエンドレスになりそうな感じで、しかも嶋井さんにいくら言つても無駄だらうと悟つて、私はそこで言いやめた。「むう」と唸つてカウンターに向き直ると、クックと後ろで堪えた笑い声。どうやら私はからかわれていたらしい。

「どうせ来たんだつたら、ちょっとくらうに話したかつたなーって思つたの。それだけ！」

言わなきやいのに我慢できずにそう言つと、嶋井さんは「はいはい」と言つて聞き流した。まるで小学生が中学生の意地悪な男子みたいだ、と思つた。

それからは、一、二組ぐらうのお客さんが出来たり入つたりの繰り返しで、さつきの忙しさが嘘みたいにいつもの夕方のペースに戻つていた。夕風、という言葉がいかにも似合いそうに感じた。

「コレだよこのペースだよ」

と私は思わず呟いた。お客様が引けて、私はテーブルを布巾で磨いていた。嶋井さんももう帰つてしまつて、お店にはマスターと私の二人きりだ。

「やっぱりこののんびりした感じがこの店らしけ」

と私が言つと、

「一日中このペースだと、大赤字だけどね」

なんてマスターはこう。忙しさから抜けてすぐのとおり、私とマスターは逆のことを言つてゐる。

「マスターは贅沢なんだよ。こじまで暇なのは駄目だけどだしこのもきりいなんて

「……」「もっとも」

といつて、マスターは苦笑する。

私は全てのテーブルとカウンターを拭き終えると、カウンターの中に入つていつてマスターをカウンターの外に追い出した。

「わ、ちょっと急にどうしたの」

マスターは私に背中を押されながら言つ。

「いいから早く席につく。今日マスターまだ一回もカウンターから出でないでしょ」

私が言つと、マスターは素直にカウンターに腰掛ける。

「今コーヒー淹れるから、まつててね」

私はケトルを火にかけてから、ミルに豆を入れて「ごりごり」と挽く。豆を挽きながら思い出したのは、店に入つたばかりのとき、豆を挽く音を聞いて言つた自分の感想だ。

「エンピツ削りみたいな音がするね」

と言つて私はマスターに笑われた。最近はエンピツ削りはおろか、シャープペンのせいでエンピツすら使わないけれど、私は手回しのエンピツ削りでエンピツを削るのが好きだった。エンピツを削る為に、嫌いな漢字の書き取りを必死でやつていた覚えすらある。そんなに削りたければ芯折ればいいのにと友達はいつたけれど、それじゃあもつたいたいし、意味がない。

この店では忙しいときは業務用の電動ミルを使うけれど、普段はこの手回しのミルを使っている。なんだかんだで電動のミルの方が利点が多くつたりするらしいのだけど、やっぱり私はこっちの方が好きだし、マスターもそんなんだと思つ。

手動のミルで豆を挽くコツは、とにかくゆっくり挽くことだ。急いで挽くと、摩擦熱で豆の薫りがどんどんてしまうのだ。

忙しさにはむかない。だけどそんなところがこの店にはぴつたりだ、と私は思う。

「なんだかサマになつてきたね」

私が豆の入つたドリッパーにお湯をおとしているのを見てマスターは言つ。

「当たり前でしょ。これでも一応、一年以上やつてるんだから」

それから私は一人分のコーヒーをカップに入れて、マスターの前に一つ置いて、その隣に座る。

「また休憩？」

とマスターは笑った。

「だつてマスター一人だと寂しそうじやん」

私がそう言つと、ふつ、とマスターは吹き出した。

「コーヒーからたちのぼる湯気も、コーヒーの香るもの、何もかもがゆっくりと感じる。だけどそんなゆっくりした時間というのは、矛盾しているかも知れないけれど案外あつといつ間に過ぎてしまうものだ。

現在六時三十分、お客さんは一人もいない。マスターと二人きり、従業員しかいない。

だけどそんな時間も、この店の役割のひとつなんじゃないかな、と思う。

「そういうえば、私が寝てた間に翔一以外にお客さんて来てないよね？」

ふと気になつてそう訊くと、マスターは平氣な顔をして「来たよ」と言った。

「みんなあゆむ君が寝てるの見て笑つてた」

マスターは少し意地悪な、そして楽しそうな声で言つた。

私は絶句して、それから大きな声で「それこそ起こすべきでしょ！」と叫んだ。なんでこの喫茶店にいる人は誰も私を起さうがないのだろう。

(後書き)

最後までお読みくださりありがとうございました。
お時間ありましたら感想いただければうれしいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6368c/>

Cafe Slow Life 忙しくもゆるやかな日

2010年10月8日13時11分発行